

平成20年度 第1回宝塚市立図書館協議会 会議録

1 開催日時及び場所

平成20年10月20日（月） 午前10時30分～12時
宝塚市立中央図書館 研修室

2 出席者

委員	矢倉委員、川崎委員、橋本委員、川島委員、 仲谷委員、上野委員、江原委員、杉江委員
事務局	社会教育部長（鷹尾部長） 中央図書館（坂上館長、小川副館長、藤野係長、近藤係長、 西川係長、栗井） 西図書館（田野係長、花村係長、篠原係長）

3 議事

(1) 平成19年度事業報告

事務局より、「宝塚市立図書館年報 平成20年版（平成19年度）」に基づき、蔵書冊数、利用券登録者数、貸出数、集会活動等について報告。

〔委員からの主な質問・意見等及び事務局からの説明〕

（委員）

他市図書館との比較欄の職員数は正規職員数なのか。

（事務局）

この欄の記載は正規職員数のみの記載であるが、実際には他にも臨時職員が働いている。当市の臨時職員も含めた職員数は、年報の「組織と業務」欄に記載しているので参照を願いたい。

(2) 平成20年度事業の取組みについて以下の3点を事務局より説明。

① 宝塚市子どもの読書活動推進計画について

この計画を実のあるものにするために、「宝塚市子どもの読書活動推進計画実施計画」策定委員会を開催し、平成21年3月頃を目途に実施計画を策定する。

② 20年度（平成19年度対象）教育委員会の事務執行に関する評価報告書について

図書館の指標は、貸出冊数・蔵書数・行事の開催回数を設定している。

③ 平成20年7月～10月末まで実施している開館時間延長の試行について

利用状況を中間報告として説明。

〔委員からの主な質問・意見等及び事務局からの説明〕

(委員)

成果指標として蔵書数を設定しているが、目標値の割に実績値は微増、ほぼ横ばい状態である。蔵書数を増やすにはもちろん予算が必要と思うが、これは予算の裏づけもあつての目標値なのか。

(事務局)

当初の経緯として、現在の総合計画において施策の評価が必要ということで、宝塚市並みの人口規模の図書館蔵書目標値として、総合計画の最終年度である平成22年度における蔵書数約65万冊を想定し、それにむけて段階的に年度の目標値を設定しているが、図書館の館数や予算的なものを加味した数値ではない。予算的には厳しい財政状況から図書費が減っているという事態にも直面しているので、達成率としては実績値と目標値の差がひろがっているという状況だが、あくまで目標値として、蔵書数増に努めたい。予算の確保という意味では、今年度においては図書館の清掃等の委託業務の入札差金を図書費へ予算流用するよう財政課と協議した。予算確保にも引き続き努めていく。

(委員)

子どもの不読率があがっていると聞いているが、学校での対策、図書館での対策と縦割り状況であるように感じる。どこでとりまとめをされるのか。計画だけでなく実のあるものにしていただきたい。中学生・高校生が行こうと思う図書館は、やはり学習スペースのある図書館ではないかと思う。ただ、本を借りに来る図書館だけでなく、中学生・高校生が長く滞在して、本に触れる時間が長くなる図書館像というものも考えていただきたい。また、不明本、未返却本の状況はどうなっているか。

(事務局)

「子どもの読書活動推進計画」を実のあるものにするため、各課の計画の進行管理を行うため実施計画を策定する。実施計画策定委員会には、図書館が中心となって、学校等関係各課が入っている。西図書館は開館当初のコンセプトとしてスペース的に滞在型ではなく、貸出し中心の図書館となっているので、学習スペースが無いが、中央図書館では123席の閲覧席を設けて、学習にも使ってもらえるようになっている。不明本については、中央図書館にブックプロテクションシステムを設置した後は、減少している。また、西図書館においても、波及効果だと思われるが、減少している。未返却本の割合は、蔵書冊数に対して0.03%程であり、メール・ハガキ・電話等で督促を行っている。

(委員)

小学校においては読書の時間を設けて、子どもの読書率の向上が図られているが、中学校においては読書の時間を確保するのが難しい。ポスター等の掲示や興味を引く本の案内などで、中学生の読書への関心をひく努力を中学校でも行っている。

また、地域の方に呼びかけて保護者の方に図書ボランティアをしていただき、学校図書館を開けて、少し読書率が上がったと聞いている。

(委員)

高校生においても、勉強・部活で忙しく、またインターネットやテレビ・携帯電話等に時間を使って、読書に対する意欲が落ちてきていると感じるが、その中でも図書館担当は地道な努力を続けている。

(委員)

今日、図書館に来館した際、小学校低学年の児童が学校の先生と、保護者の方に連れられて、図書館見学に来ている様子を見た。教育現場の方々がPTAや図書館と連携して、子どもたちが本に触れる機会を得ていることを微笑ましく思った。中学校でも地域の保護者に図書ボランティアという形で協力を得て、放課後、学校の図書館を開けるようにしている学校があるというお話しにも感銘を受けたし、ここに大きなヒント、アイデアがあると感じた。ハード面の整備だけでなく、マンパワーの大切さ、地域力、親の力が入ってくることの大事さもあると思う。

(委員)

図書ボランティアは現在、市内のすべての小学校にいるが、中学校ではどうなのか。

(委員)

中学校では図書ボランティアを呼びかけてはいるが、現状ではまだすべての学校にボランティアがいるわけではない。また、司書教諭はいるが、司書教諭も通常の授業を受け持っており、子どもたちが来れる時間に常に図書館を開けておくのは難しいというのが現状である。

(委員)

本があるというだけではだめで、人がいるということが大切である。専任の図書館に携わってくれる人、専任の先生というのが、中学校では大切だと思う。

4 閉会